北の鉄道風景

Train number; 試9250M
2023.4.24 9:54
1/60, f/20, ISO 200, f=24mm, Daylight/Sunny
5504×8256 Raw

第121回

「さくらいろ」の電車

線路の彼方に列車が見えた。眼の前の踏切の警報機はまだ鳴らない。そんな距離でも、鉄道マニアというのは面構（つらがまえ）から731系だ、いや733系だと見分ける。流石に733系と735系の判別はこの距離では無理だろう、などと他愛のないことを考えながら、やっと芽生えだした草むらに座り込んで列車を眺められる季節になった。

今どきの踏切には警報機、遮断機、非常ボタンなどが立ち並び、ものものしい姿になってしまったが、かつては郊外に出れば、ほとんどの踏切が警報機のない第四種踏切で、「ふみきりちうい」などと書かれた筆文字の札が立っているくらいだった。もちろんその文字は手書きであり、それもひらがなをただ羅列するのではなく、注意喚起できるように書体に独特の緩急をつけたものだった。その向こうにどこまでも続く線路が横たわっている風景は、ここで注意を怠れば一生

黒一色の蒸気機関車は、吐き出す煙と蒸気で一層その存在感が増した。近代車両には真似のできない技だ。宗谷本線　1975

写真と文＝眞船直樹

台無しになると言わんばかりに思えて、かえって怖かった。

そんな踏切の脇に立って聞く汽車の汽笛は、姿が見えなくとも、どの機関車か言い当てられたなあ、とさらに思索は半世紀前を徘徊する。特徴的な汽笛の機関車は、ふた駅向こうにいてもすぐに分かったし、個性的な顔の機関車は、豆粒ほどでも特定できた。

今、二十一世紀の畑の中を、電化された複線の立派な線路が走っている。その上を、ひっきりなしに特急、快速、各駅停車の電車・気動車、そして長い貨物列車が滑り抜けていくのだが、パターン化されていて、「言い当てごっこ」は今ひとつ盛り上がらない。その時、遠くの森陰をかすめただけで、はっきりと存在感を示す電車があった。たしかにこの電車の「さくらいろ」は効いている。ただ残念なのは、雲の垂れ込めた今日の天気だ。晴れた日にもう一度撮ってみようか。

はたして出来は曇りのほうがよかった。そういえば、そんな歌手や役者って、いるよなあと妙に納得した。Ⓙ